

趣 旨 説 明

原 洋之介

私はこの重点領域研究のA03計画班の代表者をしており、「地域発展の固有論理」というテーマを与えられている。班の中で、あるいは班外の方との1年半くらいにわたる様々な議論をふまえて、今日の研究集会を組織したわけである。今日と明日で、どういうことを議論していくかは「趣旨説明」という短い文章がお配りしてあるので、見ていただきたい。

領域代表の坪内さんが最近書かれた論文の中に、地域研究と経済学というのは無縁だとある。私流にいうと、経済学は地域研究に何の役にも立たないのではないかという指摘である。この指摘は、経済学を学ぶ人間にとっては大層重要な問題提起だと私個人は深刻に考え、1年半ほど経済学と地域研究の関係について私なりにいろいろと考えてきたが、まだ答えは出ていない。今日はそういう私の頭の中にある問題意識を前提にして、「発展の地域性」というタイトルで研究会を組織し、表現してみたわけである。

今年の3月、東大の山上会館での1年目のシンポジウムで、「文明の地域性」という言葉が使われている。今回のテーマはそれと語呂合わせの意味もあって、文明を発展というふうに変えただけである。発展というと普通は、1950年代以降、いまくらいまでの非常に現代に近いところの開発の時代の経済発展を意味することが多い。しかし、発展という問題をこういう時期にとどめることなく、現代の開発の時代における発展が行われるようになった歴史的な前提が形成された時代までを含めて、もう少し広く捉えてみたいと思っている。

「文明の地域性」のシンポジウムするとき、古川さんが文明とは単数形なのか複数形なのかという大変な質問をされた。それと同様に考えるなら、「発展の地域性」というネーミングの下での発展とは、私はいまのところ単数形で考えている。その単数形の発展に、ある種の地域的な個性があるのではないかと想像しているのである。できれば経済学と地域研究との関係を最終的には議論してみたい。以上のような欲張った意図を持って、この研究会を組織させていただいた。

今回の個別報告は、いままでの研究生活の中でつき合いがあった友人の中から、あえて経済史を専攻されている4人のメンバーにお願いした。西は中東エジプトから、東は中国までを含め、それぞれが選定したテーマで報告いただき、いま私がいっているような議論を、最終的には総合討論の中で詰めてみたいと思っている。まず地域が多様なので、4つの地域間比較になることを期待していると同時に、報告者が焦点をあててくれる論点も多様なものとなろう。例えば、加藤さんからは、エジプトの農産物の流通システムの問題を報告してもらい、また、中

里さんからはインドの土地所有制について、さらに加納さんからは東南アジアの国際貿易、最後に、上田さんからは中国の山区経済環境破壊について報告していただく。全体の構成としては、地域とテーマでひとつのマトリックスを形成させようとした。中国の山区経済の話が出てくるが、中国の場合には国際貿易のことはどうなんだというふうに考えることで、このマトリックスの空いているシェルに想いをはせながら、全体としては、地域間比較を試みてみようとしているわけである。

ヨーロッパの近代史、あるいは近現代史と、現代アジアで起こっている発展、工業化の問題とは、やはり重要な関係があると思う。その辺について最初に角山さんから基調講演という形でお話をいただく。そういう大きな流れを角山さんの報告でふまえた上で、個別の地域の報告をしていただき、総合討論で、先ほど坪内領域代表がいわれた問題、いま私がいつてきたような問題を本格的に論戦して詰めてみたいと考えている。司会を北海道大学の足立さんと2人でさせていただくので、総合討論の席では是非ふるってコメントしていただきたい。